

延生地蔵

飯倉を歩く

飯倉区（豊栄地区）は江戸時代、市域58か村のうち、八日市場村、高村、吉田村に次いで規模の大きな村で、1843年ごろの家数は123軒でした。中世からの集落である台谷を中心に池端、西ノ内中貫、新田などからなり現在に至っています。現在宗教法人登録されているのは三社神社と千手院ですが、江戸時代は村内に数社と4寺があり、古文書は見つかっていないものの神社境内や墓地、路

傍などに立つ石造物などを調べると分かることがあります。1716年に「村中安全」を祈って立てられた庚申塔には、「飯倉村」と刻まれ村全体で祭りしましたが、それ以降は「中貫谷中」、「池端谷中」、「台谷若者中」、「飯倉村新田講中」などと集落ごとに講中（信仰グループ）を作り活動しました。谷中とは集落の人たちのことを言ったようです。立てた人たちが分かる石造物の中で、今回紹介するのは



中貫の延生地蔵尊

「延生地蔵」です。昭和50年ごろから旧八日市場市の歴史を調査していく中で、「延生山」とか「延生地蔵」、「下野地藏尊」と刻まれたお地藏様が10体見

つかりました。そのうちの1体が飯倉中貫の寺跡隣の墓地にある1833年に「当谷（中貫）善女中」によって立てられたものです。調査当時はその由緒が分かりませんでした。その後「延生地蔵」は現在の栃木県芳賀郡芳賀町にある延生山城興寺の地藏菩薩であることが分かりました。

数年前に城興寺を訪ねた際、栃木県を中心に関東近県から子授け、安産、子育てを願う人々の参詣が今でも盛んなこと、そして江戸時代広範囲に信仰が広まった理由はよく分かっていることなど住職から聞きました。

平成10年に出された『八日市場市の社寺幟と幕』には、1847年と1853年の「延生山地蔵菩薩」と書かれた幟が載せられ、石造物が祭られた時代は1840年代に集中しています。

子授け、安産、子育ての願いは時代が移っても変わることはありません。中貫の墓地で撮影した日は盆でしたが、延生地蔵にすがすがしさを感ずりました。

（元 市職員・依知川雅一）

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080